

特集 白

日本における白嗜好とその背景 —アジアにおける国際比較研究を通して—

**Preference for White in Japan and its Background
— A Comparative Study in Asian Areas —**

齋藤 美穂 Miho Saito 早稲田大学 Waseda University

1. 日本人の白嗜好

1-1. 日本の調査における白嗜好

日本心理学会がその学術論文雑誌である『心理学研究』を世に送り出したのは1926年のことであるが、その第1巻第4号の掲載論文のうち4編は色彩に関する研究であり、またそのうち2編は色彩嗜好に関するものである。当時のアメリカにおける実験心理学の影響を受け、日本の心理学会においても色彩嗜好の研究が盛んに行われていた様子を窺い知ることができる。

しかしながら、初期のころの研究は、そのほとんどが限られた色数の純色によるもので、色相の嗜好のみに言及し、色彩の三属性という概念が充分に含まれていなかった。また分析方法等が確立し多元的な解釈を色彩嗜好において行えるようになったきっかけは、1960年ごろからのSD法と因子分析等のMDSの手法の開発にあると考えられる。

これらの色彩嗜好の研究の中でも「白」に対する嗜好が調査報告の中で明らかにされたのは、Tsukada他(1964)による研究以降と考えられるが、その後の数々の研究、例えば日本色彩研究所(1992)での調査結果における1979年から1993年に至るまでの継年推移を見ても、どの年でも白は嗜好色の第5位を下ったことがないという事実が明白になる。

齋藤・富田・向後(1991a), 齋藤・富田・山下(1991b)は日本の四都市(東京・大阪・福岡・富山)で1600

人を対象に色彩嗜好調査を実施した。調査方法はPCCS(日本色研配色体系)から選び出された10色相×7トーンの有彩色と無彩色を色見本とし、その中から嗜好色および嫌悪色の1位～3位までの選択とその選択理由を求めるというものである。表1と表2が示すように、どの属性(居住地域・性・年齢)においても、白に対する嗜好が最も高いことが指摘できる。

1-2. 欧米等との比較を通してみた日本人の白嗜好

しかし日本では安定しているこの白に対する嗜好の高さは、齋藤(1981)の行った9つの文化的グループにおける色彩嗜好の国際比較調査結果の中では、日本人に特徴的であることが指摘されている。この研究では、アメリカ、ドイツ、オーストラリア、デンマーク、南アフリカ共和国、パプアニューギニア、在日外国人、日系アメリカ人の各グループでの嗜好と日本人の色彩嗜好を上述と同じ調査方法で比較しているが、その中で日本における白嗜好が他の地域にはみられない特徴的な嗜好であることが指摘された。表3はこれらの地域の嗜好結果を数量化3類により分析し、さらに各グループのD-Scoreを示したものである。これらの数値は、その値が大きいほど両者間の嗜好がかけ離れている事を示す。この結果を見ても明らかのように、日本は他のグループからかけ離れた嗜好傾向を持つことが指摘できる。これは日本における白嗜好が他の地域

表1 日本の四都市における嗜好色と嫌悪色の上位一覧表 —総合結果と性別による結果—

order	general				male				female			
	like		dislike		like		dislike		like		dislike	
1st	white	29.6% ***	dark-purple	26.5% ***	white	30.8% ***	dark-purple	26.7% ***	white	28.5% ***	olive	26.9% ***
2nd	black	18.9% ***	olive	24.0% ***	black	20.0% ***	olive	20.9% ***	pale pink	17.9% ***	dark-purple	26.2% ***
3rd	vivid-red	17.5% ***	dark-yellowish-brown	15.3% ***	vivid-red	17.3% ***	dark-yellowish-brown	15.1% ***	black	17.8% ***	dark-yellowish-brown	15.4% ***
4th	vivid-green/ vivid-blue	11.9% 11.9% ***	dark red	14.9% ***	vivid-green	16.4% ***	dark red	14.4% ***	vivid-red	17.7% ***	dark red	15.3% ***
5th			medium-gray	13.5% ***	light-blue-green	14.3% ***	medium-gray/ olive-green	12.7% 12.7% ***	vivid-blue/ light-green	9.9% 9.9% ***	medium-gray	14.3% ***

注：表1～表6の選択率は一位から三位における選択度数を人数で割った数値である。例えばこの表の総合結果における白の選択率は1600人の被験者の嗜好色の一位から三位における白の選択度数が474であったことを示す。

* p<.05. ** p<.01. *** p<.001.

表2 日本の四都市（東京・大阪・福岡・富山）における嗜好色と嫌悪色の上位一覧表

order	like				dislike			
	TOKYO	OSAKA	FUKUOKA	TOYAMA	TOKYO	OSAKA	FUKUOKA	TOYAMA
1st	white	27.0% ***	white	29.3% ***	white	29.8% ***	white	32.5% ***
2nd	black	20.5% ***	black	17.3% ***	black/ vivid-red	18.8% 18.8% ***	black	19.3% ***
3rd	vivid-blue	16.8% ***	vivid-red	16.8% ***	vivid-red	18.3% ***	dark-red	16.5% ***
4th	vivid-red	16.3% ***	vivid-green	13.5% ***	pale-pink	13.3% ***	light-green	12.0% ***
5th	light-green	13.5% ***	pale-pink	11.8% ***	light-blue-green	11.0% ***	pale-pink/ vivid-green	11.5% 11.5% ***

* p<.05. ** p<.01. *** p<.001.

表3 D-SCORES (Like)

	U.S.A	Germany	Australia	Denmark	S. Africa	P.N.G.	Foreigners.	J-American
U.S.A.	0.00							
Germany	0.37	0.00						
Australia	0.42	0.60	0.00					
Denmark	0.49	0.30	0.55	0.00				
S. Africa	0.19	0.44	0.39	0.57	0.00			
P.N.G.	0.51	0.66	0.47	0.78	0.34	0.00		
Foreigners.	0.47	0.33	0.68	0.54	0.50	0.87	0.00	
J-American	0.30	0.60	0.44	0.66	0.29	0.25	0.74	0.00
Japan	1.26	1.21	1.60	1.40	1.25	1.38	1.24	0.85

注: S.Africa=South Africa, P.N.G.=Papua New Guinea, Foreigners.=Foreigners in Japan, J-American=Japanese American.

表4 日本と韓国における嗜好色と嫌悪色の上位一覧表

area order	like				dislike				
	Tokyo		Seoul		Tokyo		Seoul		
1st	vivid blue	33.9% ***	white	33.3% ***	olive	41.7% ***	dark red	24.3% ***	
2nd	white	23.1% ***	vivid blue	22.2% ***	dark red	17.1% ***	olive	18.3% ***	
3rd	light violet	15.9% ***	black	16.2% ***	dark yellowish-brown	15.3% ***	dark yellowish-brown	17.1% ***	
4th	light blue	14.1% ***	vivid red	12.0% ***	medium gray grayish yellow	14.1% 14.1% ***	dark blue	15.3% ***	
5th	vivid red purple	12.9% ***	vivid orange	11.1% ***		14.1% ***	deep red	14.1% ***	
6th	vivid green	12.0% ***	vivid green, vivid violet, vivid purple, pale pink	10.2% 10.2% 10.2% 10.2% ***	grayish pink	13.2% 12.3% 12.3% 12.3% ***	dark purple	13.2% ***	
7th	pale pink, pale sky	11.1% 11.1% **				12.3% 12.3% 12.3% 12.3% ***	deep red - purple, medium gray	12.0% 12.0% ***	
8th									
9th	pale lilac, dark blue	9.9% 9.9% *		pale lilac, light yellow	9.0% 9.0% *	light grayish-purple	11.1% ***	pinkish beige, dull red	
10th								9.0% 9.0% *	

* p<.05. ** p<.01. *** p<.001.

では見られない傾向であることに起因する。

さらに、この研究ではアメリカ人・日系アメリカ人・日本人の嗜好を比較することにより、居住地域での文化と色彩嗜好との関わりに関して考察しているが、その結果、日系アメリカ人は日本人より彼らの居住地域であるアメリカに近い色彩嗜好傾向を持っているということがD-Scoreの結果より示唆された。すなわち表3にもあるように、日系アメリカ人はアメリカに対しては0.30、日本に対しては0.85という数値を示しているからである。

このことはまた、居住地域の文化という環境要因が色彩嗜好に影響を及ぼす可能性のあることを指摘するものであった。

このように考えると、似たような文化を持つと考えられる地域では、類似の色彩嗜好傾向が現れる可能性

も考えられる。仮にそうであるならば地理的にも文化的にも欧米ほどはかけ離れていないと考えられる地域、例えば周辺のアジア地域と比較したならば、日本と同じ様な白嗜好が見られる可能性がでてくると推測された。

1-3. アジア地域における色彩嗜好調査

表4は韓国（ソウル）と日本（東京）を比較した研究結果（齋藤、1992）である。確かに両者の色彩嗜好に違いは見られるが、白に対する嗜好は韓国でも高く、その選択率は日本以上であることが指摘できる。このような傾向は表5で示した台湾との比較（齋藤 & Lai, 1992）でも指摘され、さらに表6の日本、中国、インドネシアにおける比較研究（Saito, 1996）でも明らかとなった。すなわちこれらのアジア地域では共通し

表5 日本と台湾における嗜好色と嫌悪色の一覧表

area order	like					dislike				
	TOKYO		TAIPEI			TOKYO		TAIPEI		
1st	vivid blue	33.1% ***	vivid blue	23.1% ***		olive	24.2% ***	olive	27.6% ***	
2nd	white	17.5% ***	white	19.2% ***		gold	16.9% ***	gold	23.7% ***	
3rd	vivid red	10.6% ***	light violet	12.8% ***		dark red	11.3% ***	dark gray	22.4% ***	
4th	vivid green, pale sky	10.0% 10.0% ***	vivid-violet, pale-lavender	12.2% 12.2% ***		dark gray, grayish pink (ltg24)	10.0% 10.0% ***	dark red	19.9% ***	
5th	deep-blue	9.4% ***				dark blue	17.3% ***			
6th	pale-green, light-violet, pale-greenish-sky	8.8% 8.8% 8.8% ***	pale sky, light blue, black	10.9% 10.9% 10.9% ***		grayish pink (ltg2)	9.4% ***	dark-greenish-blue, dark-yellowish-brown	13.5% 13.5% ***	
7th						medium gray	8.8% ***	silver	12.2% ***	
8th						dark-yellowish-brown	8.1% **	dark red purple	10.3% ***	
9th			vivid-green	10.3% ***		dark blue, grayish-yellow-green, vivid purple, beige	7.5% 7.5% 7.5% 7.5% *	olive green	7.7% *	
10th	light-green, light-blue, vivid-blue-green, vivid-purple, silver	8.1% 8.1% 8.1% 8.1% 8.1% **	light-purple	9.0% ***						

* p<.05. ** p<.01. *** p<.001.

表6 日本、中国、インドネシアにおける嗜好色と嫌悪色の上位一覧表

	like						dislike																																
	Japan			China			Indonesia			Japan			China			Indonesia																							
	1st	vivid-blue	32.0% ***	vivid-green, vivid-blue	34.2% 34.2% ***	white	24.2% ***	olive	23.4% ***	dark gray	23.4% ***	gold	29.9% ***	2nd	white	16.0% ***	gold	16.0% ***	olive, gold	22.8% 22.8% ***	dark-blue	15.3% ***																	
2nd	white	16.0% ***		vivid-blue	19.1% 19.1% ***	vivid-blue, black		grayish-pink	12.0% ***					3rd	vivid-red	12.0% ***					vivid-red, vivid-yellow, silver	14.6% 14.6% 14.6% ***																	
4th	vivid-green, pale-sky	9.7% 9.7% ***		vivid-violet, black	17.1% 17.1% ***	light-blue	16.6% ***	dark-red	10.3% ***	black	19.0% ***			5th	pale-greenish-sky	9.1% ***	vivid-red	14.6% ***	light-green	12.1% ***	dark-yellowish-brown, dark-gray	9.7% 9.7% ***	silver	13.9% ***															
6th						pale sky	10.8% ***			dark blue	13.3% ***			7th	pale-green,	8.6%	vivid-orange	12.0% ***	pale-greenish-sky, vivid-red	10.2% 10.2% ***	grayish-yellow-green	8.6% ***	olive-green, dark-greenish-blue,	10.8% 10.8% ***			8th	light-green, deep-blue	8.6% 8.6% ***	light-blue	10.1% ***					olive-yellow (dp8)	10.8% ***		
9th						light-violet	8.9% ***					dark red-purple, dark-yellowish-brown	10.1% 10.1% ***			10th	vivid-yellow	8.0% **	light-violet, vivid-yellow	9.5% 9.5% 9.5% ***	pink	8.3% **	beige, dark-red-purple	7.4% 7.4% *	dark-red	9.6% ***													

* p<.05. ** p<.01. *** p<.001.

て白への嗜好が高い事が確認されたのである。

もちろん、白嗜好以外の点に目を向けるならばそれぞれの地域に独特の嗜好傾向はある。例えば、双対尺度法によって分析した韓国の場合、その嗜好の特徴は、無彩色嗜好、Y系、YR系そしてダルトーンへの好みであり、同じ分析による台湾の場合は、PB系、P系、GY系、ライトトーンへの好みが日本と比較した場合の特徴となっている。

コレスピンド分析の結果、中国ではビビッドトーンへの高い嗜好とG系（特にビビッドグリーン）に対する嗜好が特徴であることが指摘された。また白、ビビッドブルーおよびビビッドグリーンの上位3色で全選択率の3割を占めるほど、これらの色に対して嗜好が集中するといった反応の傾向にも特徴があった。

同じ分析によるインドネシアの場合、その特徴となるのは中国とは逆にビビッドトーンを嫌うという傾向である。特にビビッドイエローは派手すぎるし明るすぎるという理由から嫌われていた。これらの各地域の色彩嗜好の詳細については文献（齋藤：1992、齋藤＆Lai：1992, Saito:1994, 1996a, 1996b）を参照していただきたい。

いずれにしても、これらの地域との比較研究結果は白嗜好がアジアのかなり広い地域にわたって見られる可能性を指摘するものであり、さらに調査対象地域を広げて検討していく必要があることを示唆するものである。さらに色彩嗜好が性別や年齢といった個体的影響要因のみならず、地理的文化的要因によっても影響されることを指摘したと言えよう。

2. 白嗜好の背景

2-1. 白のイメージ

この白に対する高い嗜好の原因がどこにあるのか即座に決定するのは難しいが、一つには色の持つイメージが作用していることが選択理由から指摘できる。白に対するイメージは、日本と韓国においてはほとんど共通しており、これらの地域では、その「純粹・清潔」さが嗜好の基盤となっていることも指摘された。

日本・中国・インドネシアでの比較調査で得られた選択理由から白嗜好の背景を探ると、日本で白が好まれた理由は「清潔」「純粹」「何とでも調和する」「さわやか」「美しい」「明るい」「やさしい」「自然なイメージ」であるのに対して、中国では「純潔」という

理由が大半を占め、そのほかには「エレガント」「明るい」「美しい」「真っ白だから」というイメージが好まれた理由に挙がっていた。また白は「神聖な色」とも表現されていた。対象者の中には「白は全ての色の源であるので内に含んでいるものが豊富である」という理由も挙げていた。一方、インドネシアで白が好まれた場合は、「清潔」「純潔」「ニュートラル」「明るい」という理由が多く見られた。

しかし若干ではあるが、中国では白を嫌っている対象者が、特に男性に見られたことに着目したい（中国：like 29.7%， dislike 8.9% インドネシア：like 24.2%， dislike 3.2% 日本：like 16.0%， dislike 0.0%）。その理由としては「生気がない」「空虚」「わびしい」「死のイメージ」といったものであったが、日本ではそのようなイメージは全く見られなかった。また上述の選択率が示す様に、インドネシアでも白を嫌う対象者が若干みられたが、「明るすぎる」「汚れやすい」「単純すぎる」などがその理由であった。このようにインドネシアでは中国と違って「死」のイメージは持たれていなかつた事が特筆すべき点であると思われる。

2-2. 各地域における白嗜好の背景

韓国の場合、白は所謂ハレの色であり、例えば市が立つ日は若い女性が晴れやかな純白の衣装に桃色の上着で近隣の村から集まってきたり、お年寄りの多くが今日でも白い衣装を身にまとっている様子を目にすることができる。韓国のような白に対する愛着の念は、遠く新羅の頃からの白への神聖視が多分に影響していると考えられる。

台湾においても白は尊い色として象徴される。昔の皇帝の冠に用いられた飾りの玉は、白と規定されていた。女性の礼服の色でも、六百石以下の官禄の婦人は白を使用できなかったという事からも、白が尊ばれてきた様子を知ることが出来る。また現在でも台湾で「白馬王子」と言えば、若い女性にとって最も理想的な恋人と将来の夫という意味を示す。

一方、インドネシアの場合に白が好まれた理由は清潔や純潔となっているが、この国における白と尊敬の念との結びつきは白い帽子に見ることが出来る。イスラムの国であるインドネシアでは毎年秋に行われるメッカへの巡礼に何万人もの回教徒がくりだが、メッカの猛暑により毎年多くの死者が出るほど、その巡礼は過酷なものと言われている。しかし、それは信仰の厚さを示すものであり、無事に巡礼を終えて帰国

したものは、それ以後白い帽子をかぶることが許され人々の尊敬を得ることができるそうである。やはりこの国でも白を特別な色彩ととらえる背景は存在する。

しかしここで指摘しなければならない事は、前述したように、中国文化になると白は死や悲しみを意味する色としての意味あいが日本より強く現れ、よって嫌われる場合もでてくるという点である。例えば台湾における蒋介石の中正記念堂が白い大理石（屋根は青紫の瓦）を使用しているのもこの悲しみの意味を含む。中国文化では日本や韓国と違いハレの色として冠婚で用いられるのは紅の方である。

このように、白を嗜好する背景はそれぞれの地域により少しづつ異なるようである。すなわち日本や韓国では主に「清潔や純粋」中国や台湾では「純潔」インドネシアでも「清潔や純潔」というように、主に清潔感やけがれのない様が白の嗜好を支えているが、「清潔」という場合には物理的けがれのない状態と結びつくのに対し、「純潔」という場合には心にけがれのない清らかな状態をも示すので、そのニュアンスは少し異なる。また前述のように、白が嫌われる場合の理由も中国・台湾とインドネシアでは異なり、前者が「死」のイメージなのに対し、後者は「明るすぎる」というのがその理由である。よって嫌う場合も好かれると同様に、その理由や背景は地域により変容することが指摘できる。

2-3. 一般論から考察する日本人の白嗜好の背景

色票の白に対する嗜好が色彩嗜好調査の中で現象として現れるのは、先にも述べた様に1964年以降であるが、古来より白は日本において好まれる理由を多く持つ色であったことが文献から確認できる。これは多分に白に対する神聖視が原因していると考えられる。日本では天照大御神のような太陽神に対する太陽信仰がその原因になっていると考えられる。その場合の白は太陽光の色という意味を持っている。漢字の「白」は「赤」と同様に太陽と関連しており、具体的には太陽の輝きを表現している。

日本古代の基本的な色名は「あか」「しろ」「あお」「くろ」の4色であったが、「しろ」には「白」という文字の他に「素」の字が使われていた。色名としての「しろ」は「しる（著）し」と同根とされているようだ。「白」が太陽の輝きを表現しているのだとすると、「素」は何も塗っていない状態や初心者を示す。

しかし本来「白」と「素」には明確に使用上の区

別があったようである。「素」と書くシロは自然のままの色彩で、その色相が何であろうと「素色（しろいろ）」と表現している。これに対して太陽や水などで加工され白色に晒されたものを「白」としている。

一方、古代日本では「白」「青」は王権や祭祀というような中心を表す色彩象徴であった。この白と青は対になって祭祀などに関するときによく登場している。また天の岩戸の神話でも、「青和幣（あおにぎて）と白和幣（しろにぎて）を賢木の枝にとりつけた……」という具合に一つのセットとしての存在が、古代日本の色彩には感じられる。この白と青のセットはモンゴルやテュルク系諸族でも、天や祭祀との関連で見かける組み合わせで登場する。

いずれにしても青と白の対は尊い神様を祀るときなどによくでてくるが、特に「白」には神秘的・超自然的な力があると考えられていた。『古事記』によれば、足柄の坂神が白鹿になり、伊服岐の山神が白猪になり、倭建命が白鳥になっている。

このような白と天や祭祀との関わりは現在でも神官の装束に見られる。すなわち白い衣は神の近くに仕える新鮮さ、清らかさ、無垢という意味を持つことから神官の装束に用いられるようになる。『枕草子』でも「白う」という言葉は新しいという意味に用いられていることを考えると、白は新鮮さをも意味したものと考えられる。「白き馬」「白き猪」「白き鶴」などのように神へのお供えは白色に限られている。

また色が律令国家体制の一環として位階制や身分制に用いられたことはよく知られているが、推古天皇（603年）の冠位十二階では上位から紫・青・赤・黄・白・黒と定められていた。しかし持統天皇（690年）の時に大宝令（701年）・養老令（718年）と修正され、上位から白・黄丹・紫・蘇芳・緋・紅・黄橡・燻・葡萄・綠・紺・縹・桑・黃・揩衣・秦・柴・橡黒となつた事は留意すべき点であろう。すなわち、白が天皇の色、黄丹が皇太子の色、そして紫が臣下の最高位の色とされたという点である。

2-4. 祥瑞との関わり

白が尊い色、最高の色という観念と結びついている原因に、このような古代律令国家の定めた服色の体系があるが、その他にも大切な要素として考えられるものに「祥瑞」との関わりがある。『古く中国では、王者の徳とその治世（予告を含む）に感應した天地が、色彩や形姿の得意な動植物や天文現象を出現させ、ま

た逆にその出現によって、王者の徳や治世を確証し、宣伝するという考え方があった。それは、觀念的な宇宙世界観・國家観・統治観をきわめて個別的に、具象的に理解し、表現し、演出するものであった。祥瑞とはこのような考えたかたのもとで出現する、あるいは出現させられた具体的なモノであり、それは州県や外国から王者のもとへ献上された。したがって、そのモノとしての祥瑞は、そのつどそのつどにおける王者の治世と天地との諸関係を表象する記号となり、つねにその読みときが必要になってくる。……』（『歴史学事典』第3巻より）とあり、祥瑞のルーツは中国にあるわけなのだが、日本での祥瑞の始まりは650年の白雉改元をもたらした白雉の献上からのことと言われる。孝德朝に白雉が出現し、さらに称徳天皇のときにも白雉が献上されている。白雉は「古来まれなる靈鳥」「吉祥」「めでたき祥瑞」として珍重された。このときすでに白色に関連したモノが出現していることに注目したい。つまり当時の人々が白に対して超能力や靈性を感じていた事と深くつながりを持つと考えられる。

しかし日本での祥瑞はそのルーツである中国とは少し異なって展開されてくる。すなわち、中国では麟・鳳・龜・龍の類が祥瑞の最高位であるのに対し、このようなモノは日本では非常にまれであることに注目すべきである。

飛鳥・奈良時代の祥瑞では「白雉」「白雀」「白鳥」「白鷹」「白狐」「白龜」「白鼠」など非常に白と関連したものが多いが、平安時代になってもその傾向は変わらず白色と関連した祥瑞が最も多い。紫色の祥瑞（特に紫雲）が13回使用されるのに対して、実に白色の祥瑞は66回も使われたことは特筆すべきであろう。

2-5. 白に対する特別視

さて、太古から伝承されてきた神話や伝説などによると「化」、すなわち化けるという極めて呪的で神秘的な現象をひきおこすモノの色の多くが白色であった。このことは古代の人々が白に対してある種の畏敬の念を持ち、神性や呪力を感じていたことを表しているといえよう。また古代の日本人は特に自然に存在する色彩などに対して一種の信仰をもって接していたと考えられるが、草や木や動物の色で不思議を感じるものに「しろ」の名前を付けて称していた形跡もある。このように白色が神秘的であり、超自然的な力を持つと考えられ、清淨で神聖な色として尊ばれてきた背景にはこのような事柄との関連が考えられる。

白が古代から特別な色として用いられてきたことは、これまで述べてきた通りだが、近世になり色彩が民衆達のものとなってきても、実は白は依然として特別な色であった。『……公家の制に、白は「当時無地のく白」衣には厳制ありて、公卿以上は白綾、五位以上は白小袖（平絹）』（慶長二十年、寛文三年武家法度）とあり、武士も功を積むと、大名に取り立てられ、白無垢を許されたというが、白は公的にはみだりに着用できない、いわば、尊貴な色とされたようである。川柳に「もののふも鳥居を越すとく白くなり」（『川柳狂歌集』「誹風柳多留捨遺」）とあり、狐は数多く鳥居を越えると、その功により位が高くなり、毛も白くなる、武士も功を積むと大名になることができ、白無垢を着ることになる、という意といわれる。また一般にもとくに伊達男の見本は、すべて白一色で、……当時は白の出で立ちで、白馬で吉原に通うのを伊達であると言い、この駄賃は他の毛色の馬より高かったそうである。』（「文学に見る日本の色」伊原昭 1994 より）とあり、その当時、多くの新しい色が人々の手により作り出され流行しても、白は特別の意味を持つ色として他の色とはまったく異なる位置づけを持っていたと考えられる。

このように考えると白は単なる色のシロではなく、人々にとってそれ以上のものであったことがわかつてくる。よって白の概念自体に特別な意味が加わっていき、ますます清浄視や神聖視と結びつきを深めたのではないかと思われる。

2-6. ものの根源としての白

しかしここで一つだけ指摘しておかなければならぬ事は、白が特別な色であるというような考え方は、何も日本を始めとするアジアの国だけに独特と言うわけではないという点である。古代ギリシャの人々は光と闇、すなわち白と黒の両極の間からさまざまな色が発生したのだと考えていた。白はいわばものの根源やものの素を象徴的に表す色でもあった。人類学者ターナーは「白は人類における最も原初的なシンボルであり、シデンプ族が人間における真善美を白で象徴していたことを強調している。

この「ものの根源」の象徴としての白は日本の場合「白装束」で見られる。これは当初は産室の中で着用する衣服を意味していた。それが次第に凶事に着用する服装となるわけだが、いずれにしても人の誕生か死に関連した根源的な意味に通じている。

2-7. 太陽信仰、騎馬民族との関わり

さて、先に白と太陽信仰との関わりを述べたが、白を太陽との関わりで尊ぶのは建国者が天神または日神であるという信仰を持つ騎馬民族の影響を受けていると思われている。倭人は藍染と思われる青色の衣服を着ていたようであり、白衣を着用するようになったのは三世紀以降のことと推測される。この白衣は東北アジアの騎馬民族の常服であり、とくに朝服や祭服として用いられた。チンギス・ハーンも「ベキ（首長）は白い馬に乗り、白衣をまとい、世のもっとも高い地位につく者」と述べたという。よって蒙古・満州・朝鮮では白が尊ばれ朝鮮を通じて東北アジアの騎馬民族の特徴的な風俗に連なると考えられている。

しかし実際は三世紀以前に日本に白い色の衣はなかったかというと、そうではなく、『すでに縄文のころからコウゾ・ニレ・藤づる・クズ・オヒヨウなどの植物纖維が水にさらされ灰汁で煮られて生なりの布として日常着に使われていた・・コウゾの布は木綿（ゆう）として神事に使われ・・日本古来の神は山であり水であり、草木であり、その靈が宿るものとして布が尊ばれた・・』（「色の語る日本の歴史」より）というように、すでに白を尊び信仰するような精神構造はあったと思われる。よってむしろそこに騎馬民族の影響が適合していったとも考えられる。

2-8. 白嗜好の変容

これまで述べてきた白嗜好の背景が、これらの一連の研究で得られたアジアでの白嗜好と直接的に結びついたとは思えないが、日本での白嗜好を考えるならば、その嗜好理由の多くが「清潔さ」であり、白の清浄視が基盤となっていることは少なくとも推測できる。

また中国ではほとんどの嗜好理由が「純潔」であったことと、白に対する神聖視が理由の中でもわずかではあるが見られたことを考え合わせると、中国でも白の持つけがれのなさ・潔白さおよび神性という意味あいが心理的な基盤となって選択されていたと考えられる。

しかしながら、ある地域にある概念が導入されてもその概念はその地域の特有な文化の中で育まれ、様相が異なってくる様が、この白嗜好を追求する中でも見えてくる。

例えば中国の場合、『禮記』にも天子が白衣を着、白玉をつけていたという記事があり、確かに天子と白の結びつきはあったし、中国は白の神秘性や権力との

結びつきをわが国に伝えた国もあるが、ここではそのうち「白い衣」は無位無官のものや役所の用務員などを意味するようになってくる。さらに仏教でも白衣は俗人の意味を示し、白衣觀音（びゃくえかんのん）は別として白は高貴な色として扱いが見られない。

よって日本では大陸から取り入れた白の概念が、この文化が古代からもっていた白への神聖視と融合し、より高まり、独特な位置づけができたのではないかと考える。このように考えると日本仏教における白色淨衣が他の地域と比べると特徴的であるのも、法然上人が説法の中で白色が最高の色であることを述べているのもうなづける。この様に日本の場合の白嗜好の背景には太陽信仰と神仏習合が何らかのかかわりを持ったように思えるが、その詳細を明らかにする為にはより進んだ研究が必要であろう。

白嗜好を騎馬民族との関わりで考えるならば、アジアのかなり広範囲な地域において白に対する嗜好が見られる可能性が推測される。しかし、その白の概念が地域の文化の中で独特な変容を遂げ行くことも推測される。逆に言うならば、そこに文化が反映されると考えられる。

2-9. 注意（attention）との関わり

心理学的見地からも白が特別な色として扱われるようになる理由を考えてみると、一つには注意（attention）との関わりがあると考えられる。反射率の高い白はうす暗い空間でも他の色より映える。よって照度の低い居住空間で生活を営んだ時代より、自分の顔を少しでも明るく目立つように見せようと女性の間で白粉がもてはやされるようになるわけだが、それはともかくとしても、白が高位の者の象徴的な色となつた理由は、高貴な色とされる紫以上に、白の持つ「目立ち」が特別な色としての性質を裏付けることになつたのではないかと考えられる。先のチンギス・ハンの言葉もその意味を含むと考えられる。

献上された「白雉」「白雀」「白狐」なども実際は突然変異であろうから、自然界においてはかえって目立つことが身の危険につながる可能性を生む。しかしそのような目立ちが特殊性へとつながり、白の特別な意味あいを強めた可能性を推測する事が出来る。換言するならば、高位のものは人よりも目立って注意をひきつける必要があるからこそ特殊性を持つ白が象徴的に用いられるようになったのではないだろうかと考えられる。

これまで述べてきた一連の色彩嗜好の国際比較調査は、主に色見本を使用したものであるが、このように考えを進めて行くと、白を選択した行動の背景には色見本の中で白の色票が目立つためとも考えられる。しかしそこに注意（attention）がもたらされ、その色が心理的に「図」の要素となるに至る理由は、単に物理的特性以外にもさまざまな要因が考えられる。それは個人によっても異なるし文化によっても異なるであろう。よって視点を変えるならば、アジアで見られた白嗜好は、アジアの人達にとって白が彼らの注意をひきつけ「図」となりやすい色であったと読み変えることもできる。しかしその背景にはそれぞれの地域における文化など、様々な要因が関連している事を充分に留意すべきであろう。何故ならば、それらの要因の読み解きこそが色彩を通じた文化の理解に繋がるのだと考えられるからである。

参考文献・引用文献

- 黒田日出男編：歴史学事典 第3巻(1995), 弘文堂
- 伊原 昭：文章に見る日本の色 (1994), 朝日出版社 .
- 村上道太郎：色の語る日本の歴史(1985),(株)そしえて財団法人日本色彩研究所：第12回消費者の色彩嗜好調査報告書データ集 (1992), 日本色彩研究所色彩情報研究会
- 齋藤美穂：色彩嗜好における Cross – Cultural Research. 早稲田大学文学研究科紀要 ,27,(1981), 211 – 216.
- 齋藤美穂, 富田正利, 向後千春：日本の四都市における色彩嗜好(1) :因子分析的研究. 日本色彩学会誌 , 15 (1), (1991a), 1 – 12.
- 齋藤美穂, 富田正利, 山下和幸：日本の四都市における色彩嗜好(2) : クラスター分析によるライフスタイル特性の類型化. 日本色彩学会誌, 15 (2), (1991b) ,99 – 108.
- 齋藤美穂：アジアにおける色彩嗜好の国際比較研究 (1): 日韓比較・白嗜好に着目して. 日本色彩学会誌 , 16 (1), (1992), 1 – 10.
- 齋藤美穂 & Lai. A.C: アジアにおける色彩嗜好の国際比較研究(2): 日台比較・白嗜好に着目して. 日本色彩学会誌 , 16 (2), . (1992), 84 – 96.
- Saito,M.:A cross-cultural study on color preference in three Asian cities : Comparison between Tokyo, Taipei and Tianjin. Japanese Psychological

JOURNAL OF THE COLOR SCIENCE ASSOCIATION OF JAPAN

- Research, 36(4), (1994), 219 – 232.
- 齋藤美穂：肌の白さの嗜好に関する比較文化的研究：
日本とインドネシアの比較. 心理学研究, 67(3),
(1996), 204 – 213.
- Saito,M.:A Comparative Study of Color Preferences in
Japan, China and Indonesia,with Emphasis on
the Preference for White. Perceptual and Motor
Skills,83, (1996a), 115 – 128.
- Saito,M.:Comparative Studies on Color Preference in
Japan and Other Asian Regions,with Special
Emphasis on the Preference for White. Color
Research and Application, 21(1), (1996b), 35 –
49.
- 齋藤美穂：色彩嗜好の構造に関する心理学的研究—
国際比較研究を通して—博士学位論文, (1997),
早稲田大学
- Tsukada,I., Funatsu,K., & Sato,M. : A study on color
preference. Acta Chromatica , 1, (1964), 131 –
146